

聖書：Ⅱサムエル 21：1～22

説教題：何をもって宥めを行ったら

日時：2019年3月10日（夕拝）

サムエル記第二は24章までありますが、前回も触れましたように、時代順の記録としては20章までで一区切りとなります。最後の4つの章には時代背景が不明なものもあり、またダビデの歌や勇者たちの名簿等が記されています。一般にこの21章以降はサムエル記全体の付録と見られています。しかしそのことは、この4つの章は価値が低いということを意味しません。むしろ著者はサムエル記を閉じるにあたって書き漏らしてはならない大切なメッセージをここにまとめて書き記したと見ることができます。

まずこの21章に記されているのはダビデの時代に3年間飢饉が起こったことについてです。ある程度の飢饉が起こるのはこの地方で珍しくはありませんが、3年間という期間はやはり長い。何かがおかしい。そこでダビデは主の御顔を求めました。すると示されたことは、「サウルとその一族に、血の責任がある」ということでした。具体的には「彼がギブオン人たちを殺戮した」ということでした。2節に、このギブオンの人々とイスラエル人は盟約を結んでいたと記されていますが、これについて書かれているのはヨシュア記9章です。ヨシュア率いるイスラエルがカナンの地に入って来て、まずエリコの町を陥落させ、さらにアイの町を攻め取った時、その地の生き残りであるギブオン人たちは、次は自分たちが滅ぼされるに違いないと考えて一つの計略を巡らしました。すなわち彼らは古びた着物を身に着け、ぼろぼろの格好をして、遠くから旅をして挨拶しに来た民であるかのような振りをしてイスラエルと盟約を結んだのです。後日、実は彼らはすぐ近くに住むカナン人であることが判明しましたが、すでに約束はイスラエルの神、主の名にかけて交わしてしまいました。そこでイスラエル人はギブオン人に手を下さず、ギブオン人はイスラエルの領土内でイスラエルに仕えて来たのです。ところが前の王サウルはイスラエルを思う熱心によって、このギブオン人たちを打ち殺してしまっただけでなく、この約束違反、契約違反の罪のために、主はイスラエルに飢饉を送られていたのです。

ここに私たちは罪を持ったままでは祝福されないという原則を改めて学びます。神は義なる神であり、聖なる神です。その方は罪を有耶無耶にしたり、それに目をつぶって祝福するということをなさない。解決されていない罪があるなら祝福は期待できない

のです。

さて、ではどうしたら良いでしょうか。ダビデはギブオン人たちに3節で問います。「あなたがたのために、私は何をすべきであろうか。私が何をもちて宥めを行ったら、主のゆずりの地が祝福されるだろうか。」今日の説教題として選んだ「宥め」という言葉がここに出て来ますが、これは神の怒りを前提にした言葉です。イスラエルの罪に神は怒っておられます。しかし私たちはこの神の怒りを人間がただ感情的に怒る時と同じようなイメージで考えてはなりません。私たちの怒りはたいてい個人的また感情的な怒りですが、神の怒りは正義が行われていないことに対する義なる方の反応です。ですから正義が正しく満足させられるなら、その怒りは宥められる。その怒りは静められる。ですから大事なことはどうしたら正義が実行されるかということです。そのことがなされるならこの地に祝福が戻って来る。ギブオン人たちもこの線に沿って考えています。彼らは言います。これは銀や金のことではない、すなわち自分たちがお金をもらって解決するというような問題ではない。また私たちがイスラエル人の間で人を殺すことでもない。すなわちイスラエルに仕返しをして解決するという問題でもない。彼らが述べたことは5～6節にあります。「彼らは王に言った。「私たちを絶ち滅ぼそうとした者、私たちを根絶やしにしてイスラエルの領土のどこにも、いさせないように企んだ者、その者の息子の七人を私たちに引き渡してください。私たちは主が選ばれたサウルのギブアで、主のために彼らをさらし者にします。」ダビデはこれを聞いて「引き渡そう」と言います。そしてこのことが実行された後、14節の最後に「そののち、神はこの国の祈りに心を動かされた」と書かれていますから、これは神ご自身の御心になう解決の仕方であったことが分かります。どういうことでしょうか。民数記35章33節：「土地にとって、そこで流された血は、その血を流した者の血以外によって宥められることはない。」創世記9章6節：「人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。」これらに示されていることは、人間が殺されたことに対する正しい償いは同じ人間の血によるということです。ですからギブオン人たちはお金を求めたのではなく、また人間的な復讐を求めたのでもなく、不正に血を流した罪に対する正義の解決を求めたのです。「7」という数字はここでは完全数を意味しているのでしょうか。おそらくサウルはそれ以上のギブオン人たちの血を流したのでしょうか、ギブオン人たちはこの7人という完全数にあたるサウルの子どもたちの命をもって正義は正しく実行されると考えたのです。

その際、ダビデは親友ヨナタンの子メフィボシェテは外したというのが7節です。ダビデはヨナタンと交わした契約のゆえに、これまでもメフィボシェテに恵みを施して来ました。その約束をここでも守っています。そして8節に引き渡された7人の名前が載っています。その中にもメフィボシェテという名が出て来ますが、それは今見た7節のメフィボシェテとは別人ですので混同しないようにしてください。こうしてサウル家に属する7人が山の上で一緒に死刑にされたのです。

今日の私たちはこのような記事を読んでショックを受けるかもしれません。サウルの罪のために、その罪とは直接関係のない子どもたちがこのように殺されることはおかしいのではないかと。しかし同時に身を置いてみれば、これは確かに痛ましい出来事とは言え、十分に受け止め、また理解し得ることだったとも思います。ここにあるのは代表性の原理、あるいは連帯性の原理です。私たちは個人として生きていると同時に共同体の中で運命を共にして生きている者たちでもあります。たとえば日本の国の大使が他の国との条約や協定に調印したなら、私個人はそれにサインしていないと言っても何の意味もありません。国の代表者がサインした内容に国民である私たちも拘束されます。それによって恩恵を受ける場合もありますし、逆に責任を取る形になる場合もあります。聖書の中でもたとえばソドムとゴモラの記事があります。アブラハムは、もし10人の正しい人がいれば、その町を滅ぼさないで下さいと主に願い出て、承認されました。その町のほとんどは墮落していたとしても、10人の正しい人がいたら、その彼らゆえに町全体を滅ぼすことはしないと主は言われた。ここにある考えも代表性の原理あるいは連帯性の原理です。

今日の章でもサウルは一国の王であり、彼の罪は国全体に関わります。本来はこのために国全体が罰されてもおかしくありません。しかしそのために7人という完全数の人々の犠牲をもって解決が図られることになりました。すでにサウルはこの世にいないのですから、イスラエルの国の中から誰かがその償いをする者とならなければなりません。その際、サウル家に属する者の中からその候補者が選ばれたのはある意味で自然なことであり、理解できることだったと言うべきでしょう。

しかしそれでも！と私たちは思うかもしれません。そうだとすると、あまりにもこれは残酷ではないか。あまりに酷すぎる方法ではないかと。しかし私たちは逆に考えてみるべきではないでしょうか。すなわち私たちがそう考えるのは、自分が犯した罪を軽く

考えているからではないのか。そのための解決をなるべく簡単なもので済ませたいとするずるい考えを持っているからではないのかと。よく殺人事件の裁判において、被害者の家族が犯人に死刑を求める言葉を聞くことがあります。その遺族にとって愛する家族を失った出来事は何千万円あるいは何億円とお金を積まれたからといって解決する問題ではない。またただ犯人を憎くて死刑にして欲しいとわめいているのでもない。そこにあるのは人のいのちを奪った者に対する正しいさばきは、それをした人自身の命が注ぎ出されるということによるしかあり得ないということです。確かに自分の家族が命を奪われたことに加えて、犯人の命も奪われることは厳粛なことです。しかしそれによってしか本当の意味での正義は実行され得ない！他のものによっては正しいさばきは行われ得ない！という感覚また苦渋の叫びがあるのでしょうか。ギブオン人も決して激情してこれを求めたわけではありません。彼らは犯された罪に対する正しい処置を求めました。その結果、サウルの家の者たち7人が殺されたことは確かに酷いことです。おぞましいことです。しかし私たちが思い巡らすべきは償いとはもともとこのようなものであるということです。それは簡単なものではなく、このような流血の犠牲を伴うものであるということです。

そしてこのような記事を読む時に私たちが思い起こさせられるのは、神がまさにこれと同じ仕方で私たちを救う道を開いてくださったことです。神は罪ある私たちをどうやって救ってくださるのでしょうか。怒りの対象である私たちをどうやって救い出すことができるのでしょうか。それはご自身の一人子イエス・キリストを私たちの代わりに十字架の死へと送ることによってでした。ヨハネの手紙第一4章10節に、御子イエス様のことが「宥めのささげもの」と表現されています。神は私たちの救いのために宥めのささげものとしての御子を遣わしてくださった。その御子の身代わりの死によって、この方により頼む私たちに対する神の怒りは宥められる。正義は満足させられる。しかしそのためにどんなにおぞましいことがあの十字架の上で行われたことでしょうか。あの日、全地は暗くなり、イエス様は「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。永遠の昔から父なる神と一つであられる御子イエス様が、私たちの罪のために父なる神から見捨てられ、切り離され、暗黒の苦しみ、地獄の苦しみを味わわれました。しかし神はこのことを通して罪人を救うための正義を満足され、救ってくださるのです。だからどんな人も、この御子キリストのもとに来なさい！と招いておられます。この方にあつて神の怒りは宥められ、処理され、私たちは神に受け入れられ、神の祝福の道を歩む者とされるのです。

最後の 15 節以降は勇者たちの記録です。ペリシテ人の名士たちに勝利した人たちの名が記されています。15 節を見るとダビデは疲れていたとあります。ピンチの状態にありました。しかしツェルヤの子アビシャイによって助けられます。以下、シベカイ、エルハナン、またヨナタンの 3 人が、それぞれペリシテ人の強敵を倒したことが記されています。特に 20 節に出て来る 4 人目の敵は手の足、指の足が 6 本ずつの合計 24 本指を持つ闘士でした。そのような人が目の前にいたら私たちは震え上がってしまうのではないのでしょうか。しかもこの人は自信たっぷりにイスラエルをそしっていました。しかしそのような怪物さえも、主がともにいてくださるなら勝利することができる。罪の問題が解決され、神との正しい関係にあることがいかに重要かということではないでしょうか。

以上の 21 章を読んで思うことは、果たして私は神の前に解決されていない罪を保ったままにいることはないだろうかということです。罪がそこにそのままあるなら神からの祝福はありません。イスラエルに 3 年間の飢饉が臨んだようなことが私たちの生活にも起こる。どうしたら良いのでしょうか。そんな私たちにとっての福音は、神ご自身が宥めのささげものとしての御子を遣わしてくださったことです。今日の章に記されたことはおぞましいことでしたが、神はこれよりはるかにおぞましいことを私たちのためにしてくださいました。ご自身の大切な一人子イエス・キリストを私たちの代わりの十字架につけ、その代償を支払わせることにより、正義を満足させ、私たちを赦し、救う道を備えてくださいました。私たちは今日の記事を読みつつ、神がこれと同じ方法で究極的に私たちのためにしてくださいましたことに思いを馳せ、感謝の礼拝をささげたいと思います。キリストの十字架においてこそ、私たちの途方もない罪に対する神の怒りは宥められ、静められます。私たちはこのキリストのもとへ行き、神の怒りから逃れ、神に受け入れられ、神との良き関係に回復される者でありたいと思います。そしてたとえ 24 本指の怪物が目の前に立ちただかっても、ともに歩んでくださる神によって打ち勝ち、乗り越えていくことができる祝福に導かれて行きたいと思います。